

## 『こころ』明治の精神

Junko Higasa 2015.6.21

豊かな教養を身につけ、人間としての素養を積む公家の慣習の中で幼年期を過ごし、鎖国を解いて開国しなければ戦争を仕掛けるという欧米列強の脅威に対する朝廷、武家、政府の思考対立闘争の中で少年期を過ごした明治天皇は、慶応4年に自らの御心を「五箇条御誓文」と同時に発表された。

それによると、武家社会で尊重されつつも名目だけの存在となってしまったのが朝廷の実情である。かつての朝廷の政では、君臣相親しんで上下相愛し、その徳は天下にあまねく行き渡り、国威は海外に光り輝いた。朕はその上下の隔たりのない治世のために骨身を惜しまず努力して苦難に立ち向かう所存である。文明開化で諸国が雄飛する中で、我が国だけが世界情勢に疎く、旧来に固執して一新に力を尽していない。朕は天下万民の安寧、国威の安定のために動く。その志に賛同が得られなければ、朕の君主としての道を失わせるだけでなく、祖先の残した天下を失うことになる。私見を捨てて公義を採り「共に進もうではないか」ということである。

それは即ち先生とKの「共に向上しよう」という誓いに他ならない。それが「明治の精神」である。

「明治の精神が天皇に始まって天皇に終わったような気がした」という言葉には、旧習に慣れて危機に気付かない臣民を鼓舞せざるを得なかった時代への追悼と、個性解放時代の危機感喪失懸念が伺える。